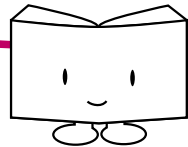


つやまっ子に贈る100冊の本



つやまっ子読書プランキャラクター「ぶっくちゃん」

大切なことを 気付かせてくれるお話



推薦者

高田 法子さん(川崎)

50年あまり前に出版された『百まいのきもの』が改訂され『百まいのドレス』として生まれ変わりました。

いつも同じ服を着ている貧しい移民の子どものワンダが、家にドレスが100枚あると言ったことで友だちにからかわれるようになります。それがいじめに当たると気付いていない子どももいれば、からかうのをやめたいと思っても、とめる勇気がない子どももいます。「いじめ」という言葉は直接出てきませんが、人種の壁や貧困がいじめにつながっていることが伝わってきます。挿絵もふんわりとしたタッチで、色合いも美しく、想像力をかき立

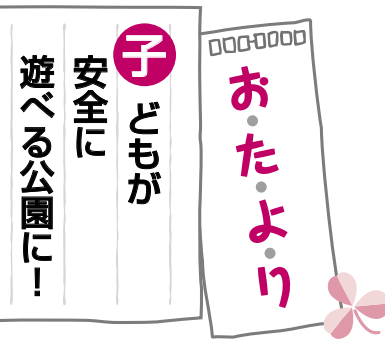
てられます。

子どものころに読んだものを、小学生の娘が感想文を書く時に再び出会い、懐かしく手に取りました。

原作は50年以上前の作品ですが、時代を越えて伝わる思いがあり、大切なことを気付かせてくれるお話です。ぜひ、親子で一緒に読んでみてください。

『百まいのドレス』

エレナー・エスティス作
石井桃子訳
ルイス・スロポドキン絵
(岩波書店)



グリーンヒルズ津山の野外ステージ上にガラスの破片が散乱していて、子どもがけがをしてしまいました。また、犬のウンチを始末しない人がいるなど、マナーの悪さが目立ちます。子どもが安全に遊べる公園であってほしいです。(下高倉西・女性)

問い合わせ先 公園緑地課
☎32・2097



公園は赤やんや高齢者、犬嫌いの人も利用します。みんなが安心して過ごせるよう、マナーを守って利用してください。

園は赤やんや高齢者、犬嫌いの人も利用します。みんなが安心して過ごせるよう、マナーを守って利用してください。

園は赤やんや高齢者、犬嫌いの人も利用します。みんなが安心して過ごせるよう、マナーを守って利用してください。

園は赤やんや高齢者、犬嫌いの人も利用します。みんなが安心して過ごせるよう、マナーを守って利用してください。

園は赤やんや高齢者、犬嫌いの人も利用します。みんなが安心して過ごせるよう、マナーを守って利用してください。

きらめく津山人

他者の声を聴き、認め合える関係を

日本朗読ボクシング協会代表

楠 かつのりさん(高野本郷出身)



ボクシングリングに見立てたステージ上で、2人が交互に自分の言葉を声に出し、どちらの声と言葉が聴き手の心に届いたかを競う「詩のボクシング」。その生みの親である楠さんにお話を伺いました。

詩との出会いは?

意外と思われるかもしれませんが、子どものころは詩や作文、読書は苦手でした。高校生ぐらいからその日の自分の気持ちをノートに書きつづるようになり、そのうち詩のようなものになってきたので詩人に見てもらいたくなりました。大学生の時、有

谷川さんとの出会いから数年後、谷川さんの助手をすることになりました。そこで、全国から送られてくる大量の詩を読んでいるうちに、ある日、すべての詩が同一人物によって書かれている感覚に襲われたのです。その時から「この人が書いている詩をこの人の言葉だと感じるにはどうしたらよいのだろうか」と考えるようになりました。

大学生のころ、演劇をしていたのですが、全身を使ってせりふを声に出すことで、文字の言葉を観客の心に響く言葉に変えていたことを思い出しました。「書き手の内面から生み出される詩、その詩を書き手自身の声で聴くことができればよいのではないかと確信しました。」



▲2月20日「ふるさと津山で育ってよかった講演会」での「詩のボクシング」の様子

また、聴き手が生きる希望を持てるように、自殺や貧困などの社会問題をテーマにし、演劇的要素を加えたステージ版「詩のボクシング」を新たに始めようと考えています。「声と言葉で社会問題にぶつかり、人が救えるのか」というテーマに真剣に挑戦したいと思っています。

「声はその人そのもの。直接他者の声を聴くことは、その人を受けとめて理解することにつながる」と語る楠さん。声を聴くことの大切さをあらためて考えてみませんか。